山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第87集

油田遺跡

一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

1994. 3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所

序

本報告書は一般国道52号（甲西道路）改築工事に先立ち、1992（平成４）年度から２年間にわたって調査された山梨県中巨摩郡甲西町田島字油田に所在する油田遺跡について、その概要をまとめたものであります。

調査はⅠ～Ⅳと設定された調査区において実施され、調査結果は以下の通りであります。

Ⅰ区は弥生時代および古墳時代の文化層が３面確認され、土器集中区、杭列、地震痕などが検出されました。遺物は第２文化層の土器集中区より弥生時代中期中葉を主体とする土器片、黒曜石剝片等が多量に検出され、また第２文化層の旧河川内では弥生時代中期後葉の土器片とともに木製の竪杵、磨製石鏃が出土しています。Ⅱ区は古墳時代の文化層が２面確認され、土器集中区などが検出されました。Ⅲ区は弥生時代と古墳時代および平安時代以降の文化層が３面確認され、遺構は平安時代以降の水田跡11枚、古墳時代後期末葉の祭祀跡１ケ所などが検出されました。遺物は古墳時代後期を中心とする土器片および祭祀跡に伴う獣骨（馬の歯）などが出土しています。Ⅳ区は弥生時代中期およびそれ以前の文化層が２面確認され、溝状遺構が１条検出され、遺物は遺構外より弥生時代前期末葉から中期初頭の条痕文系の土器片が少量出土しています。

今回の調査では弥生時代中期の遺物が比較的まとまって出土しており、県内においては希少であり、この地域を初めとして県内における弥生時代研究の基礎となる資料と思われます。

末筆ながら、種々ご協力を賜りました関係機関各位、地元の方々並びに直接調査、整理に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1994（平成６）年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　大塚初重

目次

１．調査の経過
２．遺跡をとりまく環境
３．発見された遺構と遺物
４．まとめ

例言

１．本書は、1992（平成４）年度および1993（平成５）年度に実施した山梨県中巨摩郡甲西町字田島に所在する油田遺跡の発掘調査概報である。

２．調査は、一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が建設省より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。

３．本書の執筆・編集は保坂和博・松土一志が行った。

４．本報告書にかかる出土品・図面・写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

1．調査の経過

1）調査の事務経過

一般国道52号線の改築工事に先立ち、平成２年度に一部遺跡の確認調査を実施し、この油田遺跡を含むいくつかの遺跡が発見された。油田遺跡は甲西町田島字油田に所在し、平成４年度～平成５年度にかけて発掘調査が実施された。

発掘調査の日程は以下のとおりである。

• 平成２年６月19日～10月12日

甲西道路改築工事路線内遺路確認調査で油田遺跡を確認。

〈平成４年度（第１次調査）―Ⅱ・Ⅳ区〉

• 平成４年９月14日～12月28日

発掘調査実施。

〈平成５年度（第２次調査）―Ⅰ・Ⅲ区〉

• 平成５年５月11日～12月17日

発掘調査実施。

2）調査の実施

調査区はⅠ～Ⅳの４地区に分けられ、平成４年度にⅡ・Ⅳ区、平成５年度にⅠ・Ⅲ区の調査を実施した（第２図）。各年度の調査内容は以下のとおりである。

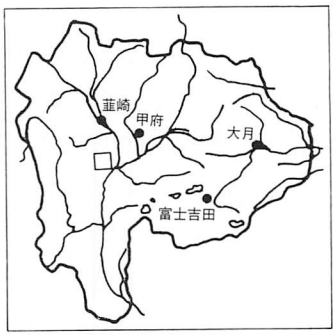
〈平成４年度（第１次調査）―Ⅱ・Ⅳ区〉

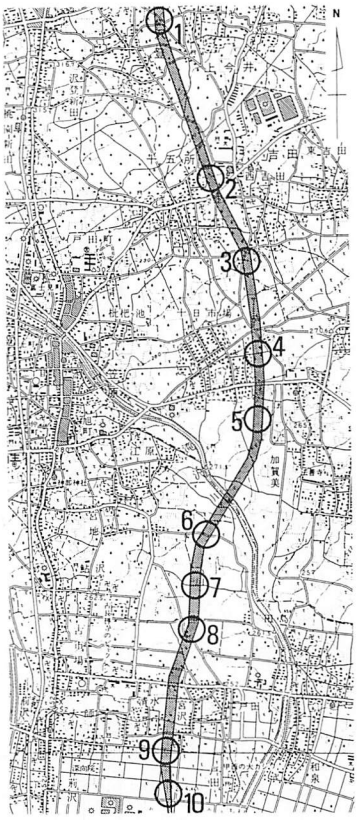
調査面積：Ⅱ区は調査区北側に２面の文化層が確認され調査を行った。南側は旧河川により削平されていた。調査総面積は3,540㎡である（第７・８図）。Ⅳは調査区南側に３面の文化層が確認され調査を行った。北側の第１面から第３面は旧河川により削平されていた。調査総面積は4,400㎡である（第11・12図）。

グリット設定：５ｍメッシュを設定し、東西方向を東からａ～ｋ、南北方向を南から１～35の記号を付けた（第３図）。

〈平成５年度（第２次調査）―Ⅰ・Ⅲ区〉

調査面積：Ⅰ区は調査区南側において、南から北に舌状に展開する微高地の先端部に３面の文化層が確認され調査を行った。北側は旧河川により削平されていた。調査総面積は6,000㎡である（第５・６図）。Ⅲ区は３面の文化層が確認され調査を行った。調査区西側の第１・２面は旧河川により削平されていた。調査総面積は3,000㎡である（第９・10図）。





1．七ツ打Ｃ遺跡　（中世～近世の溝状遺構）
2．十五所遺跡　（古墳時代の集落跡）
3．村前東Ａ遺跡　（古墳・平安時代の集落跡）
4．新居道下遺跡
（古墳・奈良・平安時代の集落跡）
5．二本柳遺跡
（平安～江戸時代の水田跡、中世の墓壙）
6．向河原遺跡
（弥生・近世の水田跡、中世の水路跡）
7．油田遺跡
（弥生・古墳時代の土器集中区、
平安時代以降の水田跡）
8．中川田遺跡　（中世の水田跡）
9．大師東丹保遺跡（弥生・鎌倉時代の水田跡）
10．宮沢中村遺跡　（近世の寺院跡）

第１図　遺跡位置図
（1／50,000）

グリット設定：５ｍメッシュを設定し、東西方向を東からＡ～Ｋ、南北方向を南から０～33の記号を付けた（第３図）。

付記　平成４年度の調査で設定したグリットとは異なる。

３）文化層について（第４図）

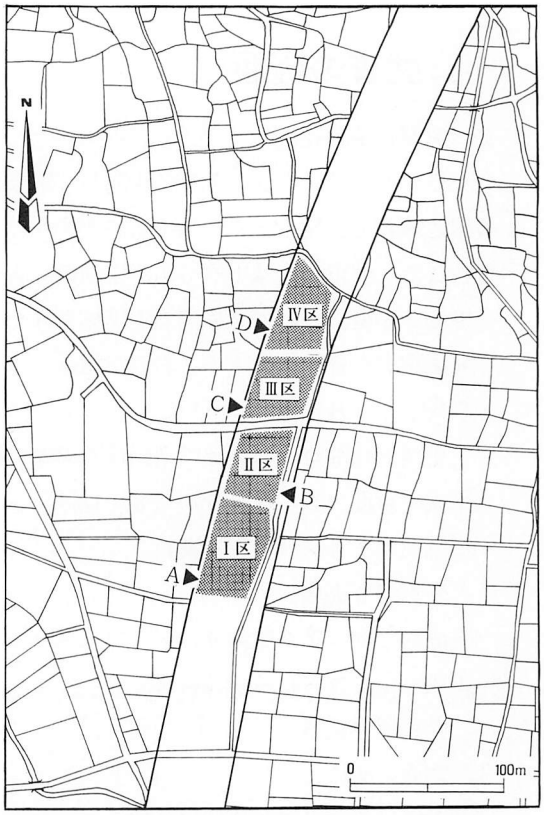
油田遺跡のⅠ～Ⅳ区における文化層の層序関係は滝沢川の氾濫源という地理的状況より一様なものではないが、基本的には弥生時代から平安時代にかけての文化層が存在すると考えられる。

第１文化層は平安時代に比定され、表土層（１層）直下に存在する。調査区南側（Ⅰ・Ⅱ区調査地点）は砂礫層によりかなり削平されており遺構の検出は困難であった。調査区北側（Ⅲ・Ⅳ区調査地点）は比較的遺存状況は良好であり、遺構が確認された。

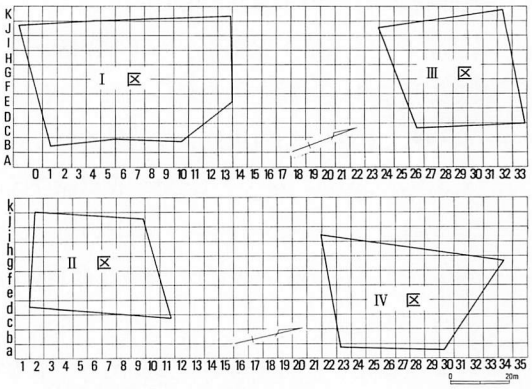
第２文化層は古墳時代に比定される。第２文化層直上に堆積する砂礫層（３層）は調査区南側（Ⅰ・Ⅱ区調査地点）では厚く堆積し北側に行くに従い徐々に薄くなり、Ⅲ区北側からシルト層に移行している。遺構面の遺存状況はこの砂礫層の堆積状況に比例し、砂礫層が厚く堆積しているⅠ・Ⅱ区は、かなり削平されている。

第３文化層は弥生時代に比定され、各地区内において比較的安定した堆積状況を呈している。第３文化層直上層（５層）はⅠ～Ⅲ区ではシルト層、Ⅲ区北側およびⅣ区では砂礫層の堆積が確認され、北側に移行するにつれて遺構面の遺存状況は悪くなっている。

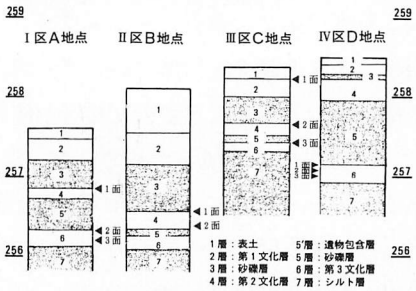
第３文化層の下層において黒色を呈す文化層が数面確認され、Ⅱ区およびⅣ区で調査を行ったが、遺物・遺構は全く検出することはできなかった。



第２図　油田遺跡発掘区（1／500）
（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ：基本層序確認地点）



第３図　グリット設定図（1／5,200）



第４図　基本層序および調査地点（◀印）

2．遺跡をとりまく環境

1）地理的環境

油田遺跡は山梨県中巨摩郡甲西町田島字油田の標高259ｍに位置する。この地域は甲府盆地西縁の櫛形山より急激に釜無川に向かって下る滝沢川によって形成された小扇状地扇端部にあたり、湧水が数多くみられ、水の豊富な地域として知られている。今回の調査においても、表土下約１ｍ程で土壌のグライ化が観察されている。また、各調査区内を北西から南西方向へ横断する形で大規模な滝沢川の氾濫による砂礫層の堆積が幾筋にも確認されている。

2）歴史的環境（第１図）

甲西町にも縄文時代から中世に至る各時代の遺跡が数多く存在し、これらの遺跡の分布状況は微高地、扇状地というそれぞれの地形に適した各時代の遺跡が存在している事を示している。台地には縄文時代の遺跡、微高地には弥生時代から平安時代の遺跡が数多く存在している。また、扇状地においてはこれまで古墳時代以降の遺跡が中心に確認されていたが、甲西道路改築工事に伴う調査により弥生時代の遺跡の存在も明らかにされてきている。

3．発見された遺構と遺物

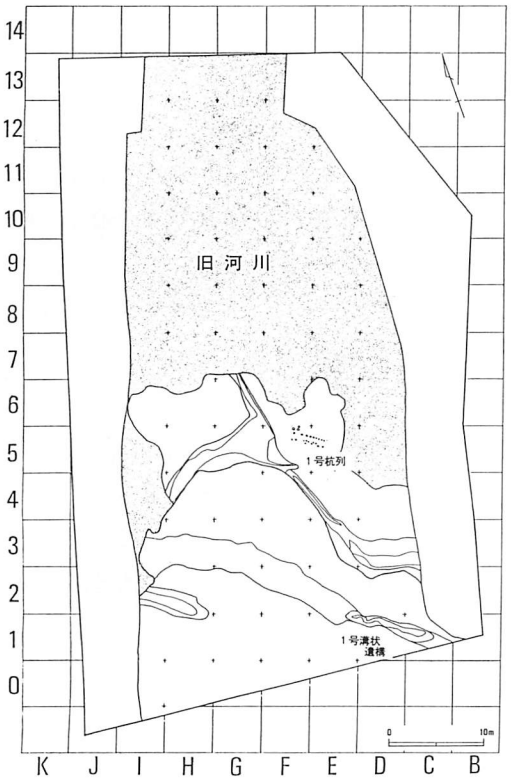
各地区において発見された遺構は以下のとおりである。

調査区	文化層	遺構名―検出数(号数)	時　期	主な伴出遺物	備　考	拝図番号
Ⅰ・Ⅱ区	第１面	杭列―２条(１・２号)	古墳時代		３種類の杭が使用されている	第５図
		溝状遺構―１条(１号)	古墳時代			第５図
	第２面	土器集中区―１箇所(１号)	弥生時代中期中葉	壺・甕(土師器)、石器(黒曜石剥片・石鏃)、獣骨(イノシシ・シカあるいはカモシカ)	祭祀跡の可能性が考えられる	第６図
Ⅱ　区	第１面	溝状遺構―１条(２号)	古墳時代後期			第７図
	第２面	土器集中区―１箇所(２号)	古墳時代後期	小型壺・甕・椀（土師器）、甕（須恵器）	祭祀跡の可能性が考えられる	第８図
Ⅲ　区	第１面	水田址―11枚	平安時代以降	土器片少量		第９図
	第２面	溝状遺構―４条(３～６号)	古墳時代後期	３号・６号：土器片少量		第10図
		祭祀跡―１箇所(１号)	古墳時代後期	高坏・甕(土師器)、椀・甕(須恵器)、炭化物、獣骨(イノシシなど)		第10図
		集石―２基(１・２号)	古墳時代後期		祭祀跡に伴うと考えられる	第10図
		土器集中区―２箇所(３・４号)	古墳時代後期	甕（土師器）、炭化物、獣骨（イノシシなど）		第10図
		ピット―11基（１～11号）	古墳時代後期		祭祀跡に伴うと考えられる	第10図
		土坑―１基(１号)	古墳時代後期			第10図
	第３面	溝状遺構―１条(７号)	時期不明			
Ⅳ　区	第１面	溝状遺構―１条(８号)	弥生前期末～中期初頭			第11図

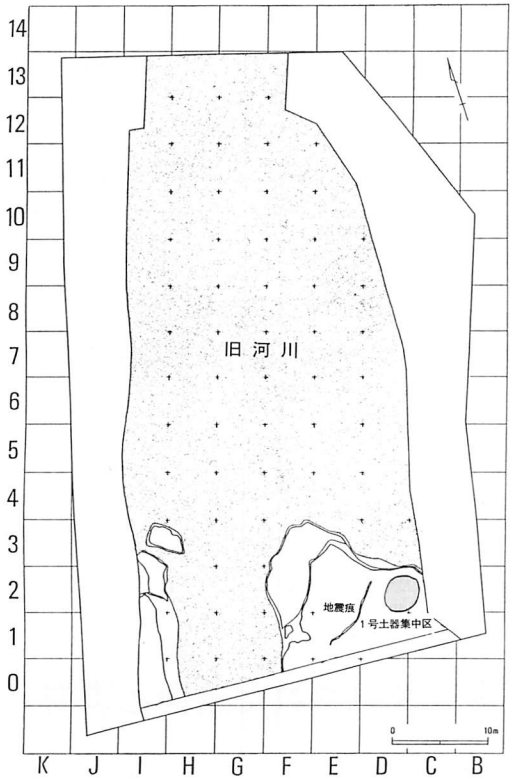
第１表　油田遺跡検出遺構

1）発見された遺構

〔杭列〕　（第５図）Ⅰ区第１面で２条平行して検出され、杭の上端は上層の砂礫層により破壊され根本部のみ残存していた（図版１）。用途は北側の旧河川より第１面（微高地先端部）へ水を引き込む用水路として使用されたと考えられる。杭の形状は加工を施していないもの（丸形）、加工を施しているもの（長方形、正方形）の３種類に分けられ、加工を施しているものはいずれも先端部に残るＡ種刃先痕より鉄製工具で尖らされていると考えられる[注1]。

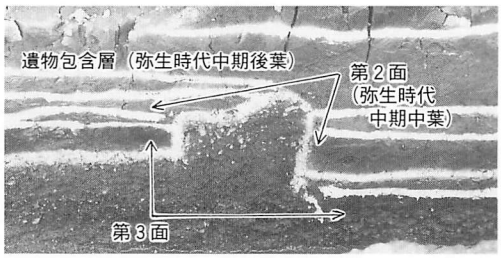


第５図　Ⅰ区　第１面全体図
（古墳時代）



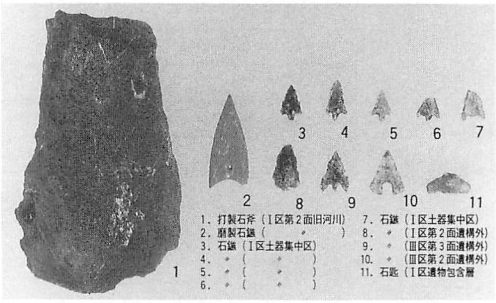
第６図　Ⅰ区　第２面全体図
（弥生時代中期中葉）

図版１　Ⅰ区　第１面１号杭列（南側から）



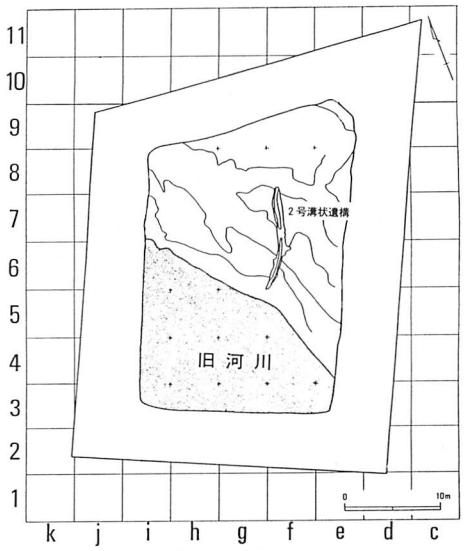
図版２　Ⅰ区　第２面液状化跡（西側から）

図版３　Ⅰ区　第２面旧河川出土土器

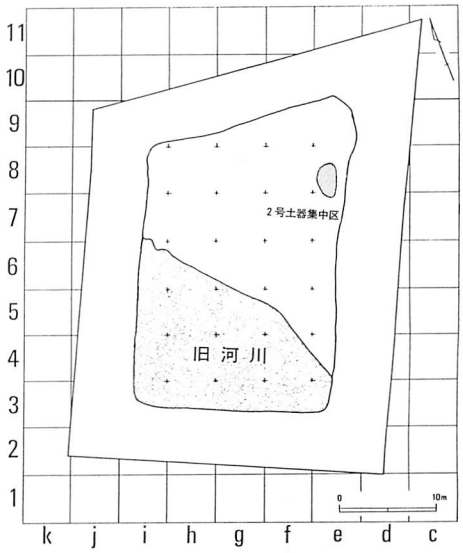


図版４　油田遺跡出土石器

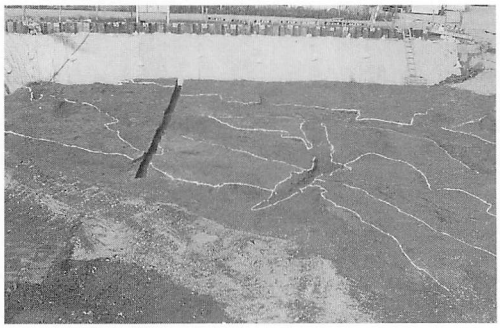
図版５　Ⅰ区　第２面旧河川出土木製品（堅杵）



第７図　Ⅱ区　第１面全体図
（古墳～平安時代）

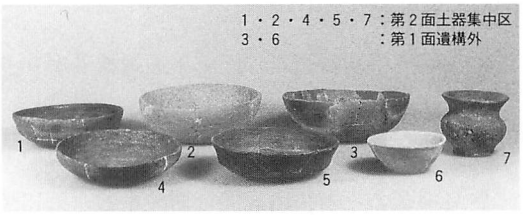


第８図　Ⅱ区　第２面全体図
（古墳時代後期）



図版６　Ⅱ区　第１面完掘状況（南側から）

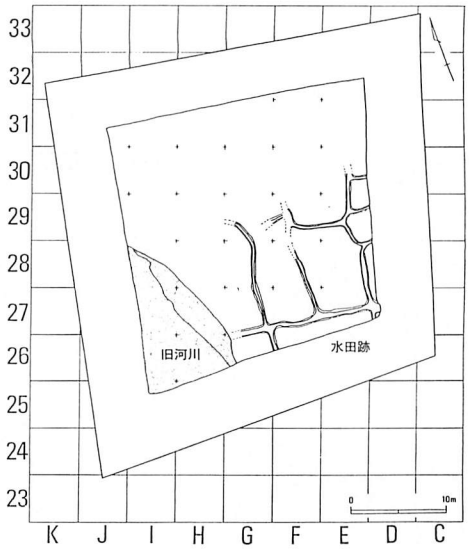
図版７　Ⅱ区　第２面２号土器集中区



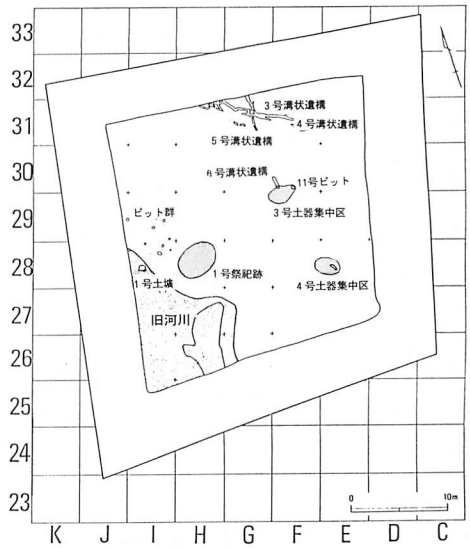
図版８　Ⅱ区　第１・２面出土土器

〔地震痕〕　（第６図）Ⅰ区第２面で地震による砂脈、噴砂、液状化層、断層が検出された。砂脈は遺構面から20㎝以深にある砂礫層の液状化に起因し、北東―南西方向に長さ８ｍ、最大幅10㎝の割れ目に沿って砂や礫（最大径１㎝）が確認されている。断層は砂脈を境として上下方向に約10㎝の食い違い（東下がり）を示していた（図版２）。地震の時期は砂脈が第２・３面の遺構面および第２面上層のシルト層を引き裂いているが、その上層の弥生時代中期後葉の遺物包含層に覆われていることから、弥生時代中期後葉以前と考えられる。一般に液状化し難いと考えられている砂礫層から噴砂が発生していることから、かなり激しい地震動が予想される[注2]。なお、本遺跡の１㎞南側に存在する大師東丹保遺跡[注3]においても検出されている。

〔祭祀跡〕　（第10図）Ⅲ区第２面に木の根本部が検出され、この周辺に集石２ケ所、土杭１基、ピット群、古墳時代後期（鬼高）の多量の土師器片・須恵器片および馬の歯、炭化物などが伴出しており、木のたもとで馬の骨を祭った祭祀が行われたと考えられる。

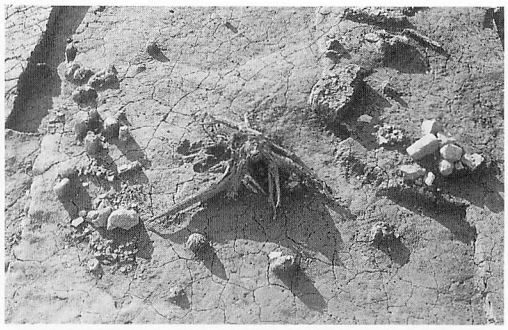


第９図　Ⅲ区　第１面全体図
（平安時代以降）



第10図　Ⅲ区　第２面全体図
（古墳時代後期）

図版９　Ⅲ区　第１面完掘状況（南側から）



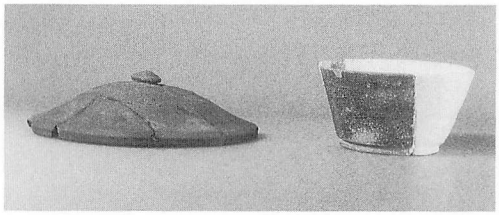
図版10　Ⅲ区　第２面１号祭祀跡（東側から）

２）発見された遺物

〔弥生時代の土器〕

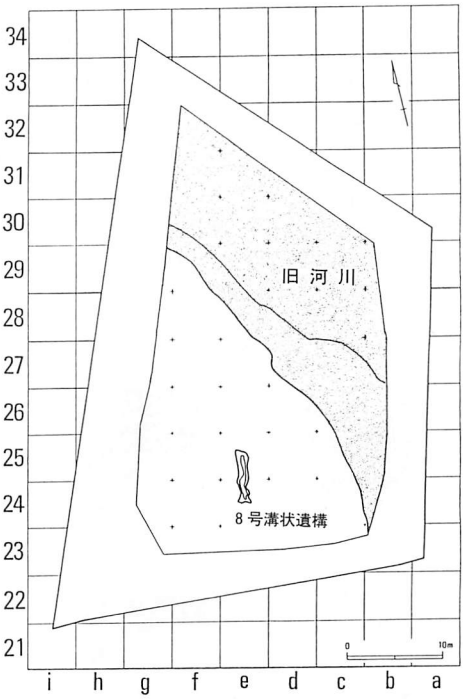
前期末葉～中期初頭：Ⅳ区第１面遺構外より条痕文系の甕が出土している（図版13）。

中期中葉：Ⅰ区第２面Ｃ－２グリット周辺の土器集中区より須和田式併行期の土器（第13図１～２）が出土し、器種は壺、甕がみられる。紋様は胴上半部に縄文を地文として同上に篦描きの太形沈線（円形紋など）を巡らして施している壺（１）や胴下半部に条痕がつけられ、底部に網代圧痕がみられるもの（２）がある。

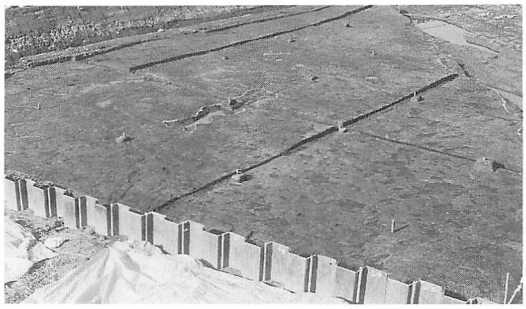


図版11　Ⅲ区　第２面１号祭祀跡出土土器

中期後葉：Ⅰ区第２面の旧河川により栗林Ⅱ式～百瀬式併行期の土器（第13図３～20）が多量に出土している。器種は壺、甕がみられ、甕は口縁部が外反するものと受け口状をなすものがある。甕の紋様は頸部に櫛描きの簾状文（８）、波状文（７・８・12）を描くものが多く、口唇部を縄文で押捺とするもの（４）や「コ」の字重ね紋を持つもの（11）などもある。壺の紋様は頸部に主体的にみられ太い沈線で平行線を描いたもの（13）、櫛描きの波状文や簾状文を施したもの（14・18）、貼付文が付けられたもの（19）、縄文を地文とするもの（20）などがみられる。



第11図　Ⅲ区　第１面全体図
（弥生時代前期末葉～中期初頭）



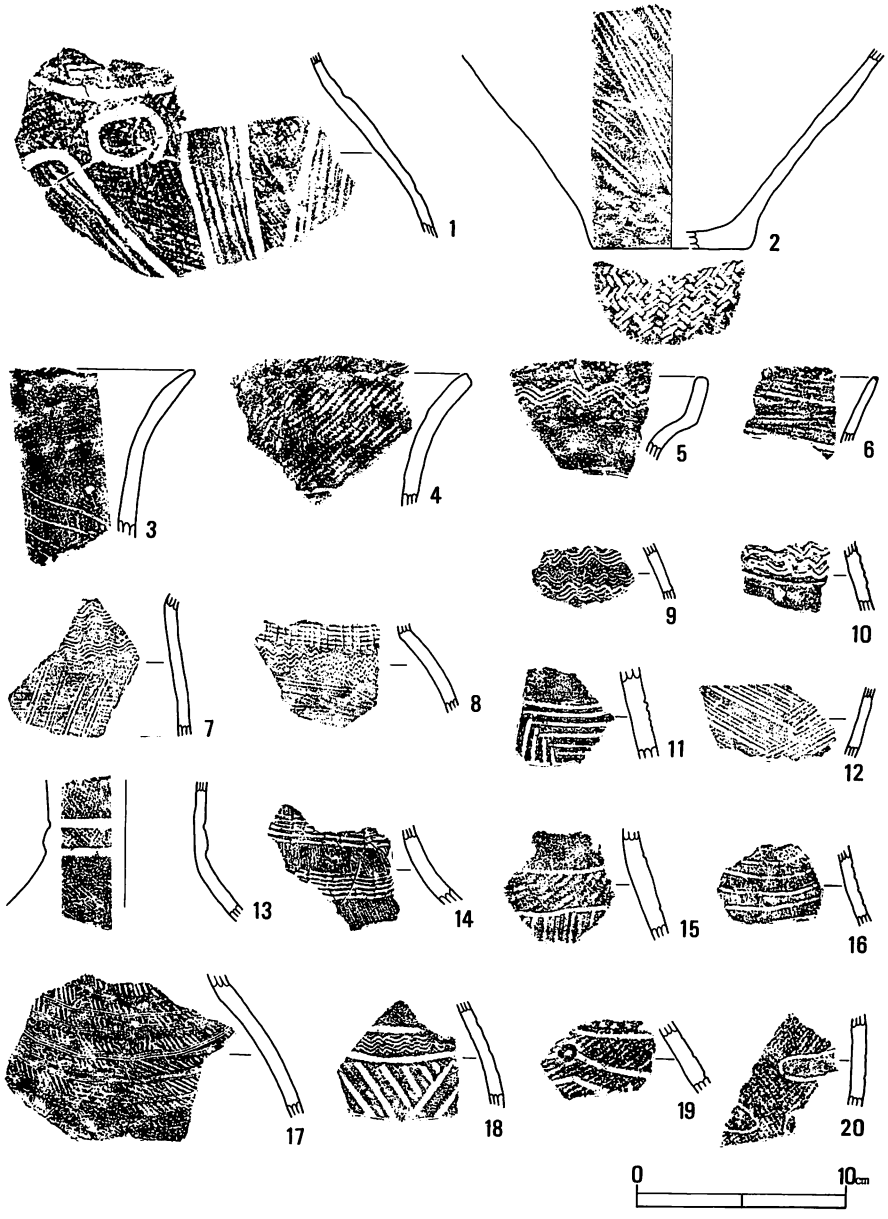
図版12　Ⅳ区　第１面完掘状況（南東側から）

図版13　Ⅳ区　第１面遺構外出土土器
（弥生時代前期末葉～中期初頭）

〔石器〕　Ⅰ区第２面Ｃ－２グリット周辺の土器集中区（第６図）より、黒曜石の石核・剝片（フレイク・チップ類）および石鏃（図版４－３～７）が伴出している。黒曜石の出土状況により、石器製作が行われたものと考えられる。この地点からはイノシシ、シカあるいはカモシカなどの獣骨が検出されており、田畑を護る狩猟が行われていたと考えられる一方では、石鏃が凹基式および凸基有茎式の２種類あり、特に凸基有茎式石鏃が多い点からは武器としての弓矢に変容したものと考えられ、弥生時代中期中葉という時代性を反映している面も考えられる[注4]。Ⅰ区第２面の中央部やや西よりには北―南方向で旧河川があり、多量の弥生時代中期後葉の土器片、木製の竪杵とともに磨製石鏃（図版４－２）および打製石斧（図版４－１）が流れ込んでいた。磨製石鏃は最大長4.6㎝、最大幅1.1㎝を計り、両側縁が刃部となり、股部に近く二孔が穿たれた無茎偏平な形を呈している。打製石斧は残存長14.8㎝、最大幅8.8㎝を計り、粘板岩を用材としている。

〔木製品〕　（第６図）既記したⅠ区第２面の旧河川により、多量の弥生時代中期後葉の土器片とともに竪杵（図版５）が出土し、最大長78.5㎝、最大幅7.2㎝を計り、形態は握部を搗部に比べて細く造り出すのみで、両部分の境は不明瞭であり、合田茂伸氏の分類によるＣ類に属するものである[注5]。また表面の加工痕より鉄製工具で作られたと考えられる[注6]。

注１　宮原氏は弥生時代の木製品に残る加工痕を分析し、Ａ種刃先痕は鉄製工具、Ｂ種刃先痕は石製工具によって生じると考察している。
　　宮原晋一「石斧、鉄斧のどちらで加工したか」『弥生文化の研究』10　1988
注２　寒川　旭『地震考古学』　1992　中公新書
注３　大師東丹保遺跡では弥生時代後期の遺構面において検出され、砂脈の方向は本遺跡とは異なっているようである。
　　「大師東丹保遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第86集』　1994　山梨県教育委員会
注４　東　　潮「武器」『季刊考古学　第23号』　1988
注５　合田茂伸「弥生時代の杵と臼」『網干善教先生華甲記念考古学論集』　1988
注６　（注１）前掲論文



第13図　油田遺跡出土土器（弥生時代）

4．まとめ

油田遺跡では弥生時代前期末葉から平安時代の遺構、遺物が検出された。特に地震痕の検出によりこの地域の歴史を探る新たな手がかりを得られ、またこれまで県内においては希少な弥生時代中期中葉および後葉の土器群が発見され、該期における周辺地域（長野、静岡、南関東など）との関わりが浮き彫りにされたことは大きな成果である。さらに今回の調査では弥生時代の水田跡は検出されなかったが竪杵等の発見により、この地域で稲作農耕が行われていたことは間違いなく、自然科学分析および火山灰分析と合わせ古環境復元へのアプローチを今後行っていきたい。

調査組織

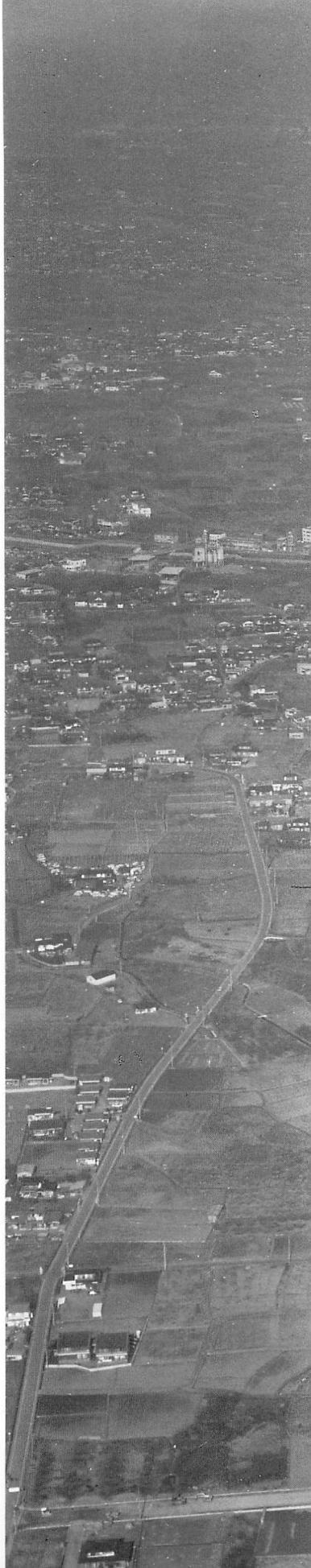
調　査　主　体　　山梨県教育委員会
調　査　機　関　　山梨県埋蔵文化財センター
調 査 担 当 者　　保坂和博（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
　　松土一志（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
作業員・整理員　　青木小春、青木とよじ、青木雪技、青木恵美子、秋山欣三、麻生菊江、厚芝成美、有泉登茂子、井上和美、井上ことじ、井上増美、井上巴江、井上ひさえ、井上とめ子、石川いく子、石川百枝、石川文治、石川幸子、石川房男、石川恭子、伊藤正子、伊藤としの、伊東智恵子、石倉みつ子、石倉憲雄、内池宣子、大川要七、大木秀子、大木つや子、大久保武志、大久保初子、大森武雄、大森権蔵、大堀次雄、小川良子、長田なをみ、小田切ちよみ、乙黒さつき、小野節子、小野嘉美、河西幸子、河西好恵、川住好恵、菊地富士子、木邨まつ子、河野景子、河野なみ江、斉藤増子、斉藤幸子、桜林文雄、塩沢雪江、清水つよむ、清水豊子、清水みつえ、志村福男、神宮寺正義、杉山なつよ、田中虎雄、千野正雄、千野良男、鶴田満雄、内藤春枝、内藤一江、中込貴子、中込芳則、中村まさ子、名取明子、西海元子、西山幸子、原田ちづる、深沢直樹、深沢悦子、松野充延、松野なを美、松本しま子、望月厚子、望月泰子、森本紀美子、渡辺洋子、依田昌一
協力者・機関　　甲西町教育委員会

報告書概要

フリガナ		アブラダイセキ		
書名		油田遺跡		
副題		一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報		
シリーズ		山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第87集		
著者名		保坂和博・松土一志		
発行者		山梨県教育委員会　建設省甲府工事事務所		
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話		〒400-15　山梨県東八代郡中道町下曽根923　　TEL　0552-66-3881		
印刷所		合資会社　ヨネヤ印刷		
印刷日・発行日		1994（平成6）年3月22日・3月30日		
油田遺跡（あぶらだ）		所在地	山梨県中巨摩郡甲西町田島字油田148-1 他	
		25,000分の1　地名・位置・標高	小笠原	北緯　35°35′45″　東径　138°29′58″　標高　259m
概要	主な時代	弥生時代中期中葉～後期、古墳時代後期～平安時代		
	主な遺構	祭祀跡、土器集中区、土杭、杭列		
	主な遺物	弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石製石器（石鏃）、磨製石鏃、打製石斧、獣骨、種子		
	特殊遺構	地震痕		
	特殊遺物	竪杵		
	調査期間	1992（平成4）年9月14日～12月28日，1993（平成5）年5月11日～12月17日		

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第87集

1994年３月22日　印刷
1994年３月30日　発行

油　田　遺　跡

編集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
ＴＥＬ　0552-66-3881
発行　山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
印刷　合資会社　ヨネヤ印刷